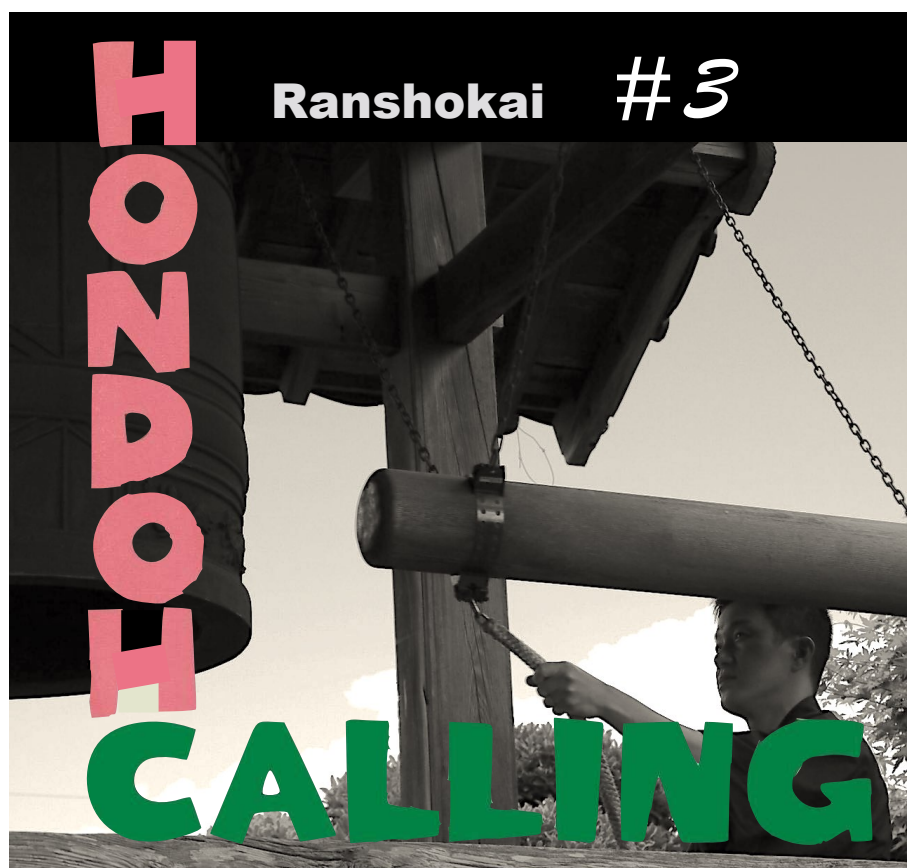


【ナムナム】

南無/numb

マヒした心を解きほぐす。坊主のつぶやき。



INTERVIEW

よしなしごと

“心に浮かんで消えていくたわいもないこと”をもっともらしく語り合うこのコーナー。今回のお相手は、アート・デザイン・工芸などに精通し、フリーライターとしても活動しておられる広瀬徹也さん。

広瀬さんの著書『うしとうそ とやまの土人形』を眺めながらコーヒー片手に語り合った。

公文名 智

Satoru Kumona

射水市市井 光照寺寺院。
大学在学中より映画に傾倒。
常に時代を問い、表現の場を模索中。子煩悩。
『南無/numb』編集長。



Profile photo : Hiroko Takeda (Kumona/Hirose)

失われつつある価値あるもの

公文名 広瀬さんとは『ふるこはんフェス』(※1)でお会いしたのが初めてだったと思います。アート工芸、デザインや地域づくりのプロデュースをされているとのことですが、今の仕事に携わるようになった経緯など教えていただけますか？

広瀬 元々は金融や広告業界にいたのですが、数字やお金の動きだけで価値判断されていく社会、自然との調和を無視した街づくり、心を病んでいく人の多さ。そういったことに悩んでいました。そんな中で、もともと好きだった工芸や、可愛いものをきっかけに民藝(※2)に惹かれていきました。そして民藝の話で代表と意気投合し、その思いを共有できる今の会社に合流したという感じです。

公文名 その「思い」というのは具体的にどういったものですか？

広瀬 んー、失われつつある価値あるものに、目を向ける視点とでもいいますか。埋もれている工芸品や民間伝承、失われそうだけどこれって大事だよねというものに改めて目を向けてもいいのではないかと

『うしとうそ とやまの土人形』



う思いですかね。そういった思いを大事にしながら個人としても文章を書いたりしています。

公文名 広瀬さんは富山民藝協会の会長でもあり、二〇一七年には『うしとうそ とやまの土人形』という本も執筆なさっています。時代の流れの中でまさに失われつつあった「とやまの土人形」に関する著作でしたが、そこで語られている、手仕事、についての考察がとても印象深かったです。

手仕事の魅力

広瀬 ありがとうございます。僕がこの本で述べていることのひとつには、規格化された工業製品には無い「手仕事の魅力」があります。人の手によって形づくり、自然の素材で着色していく過程で、表情の違いや色むらを生み、手作りゆえの個性差が生じる。同じモチーフでもひとつひとつ違いがあることで、私たちは作り手の想いを感じとったり、愛着が湧いたりするのだと思います。近年主流になったアクリル絵の具での着色は失敗も少なく量産に適していますが、観る側にとってはスキがなくどこか寂しく感じます。

公文名 スキがないことを批判的にとらえる視点がとても面白いです。キレイで均質なモノが大量に並んでいることの味気なさ。

広瀬 そうですね。「土人形」と「手仕事」を通して考えてみたかったことは、科学全盛、商業資本主義の時代において本当の豊かさとは何だろうということでした。「スキがない」「ゆとりがない」「ゆるさが足りない」「遊びがない」「余白がない」、そんな不寛容な社会は果たして健全な社会と言えるだろうか、という思いです。

公文名 手仕事の魅力に目を向けることは、この社会のあり方に目を向けることにも通じるということですね。職人さんの手仕事とともに、ゆとりや遊び、余白のある社会までもが今まさに失われつつあると。

火葬場の話

公文名 この本を読みながら考えていたことがあります。今年の四月から僕の住む射水市では火葬場が移転し新設されました。これまでに数回お別れに立ち会いましたが、僕が抱いた印象は「人の手、手を離れてしまった」というものです。クリーンな空間で機械的に、効率的に進んでいくことへの違和感と言いますか。文字通りの、手、を離れただけでなく、野焼きの時代にあった五感を通して感じる生々しさ、香りや音、重みといったものが本当に失くなってしまったという感じがしました。炉に入る直前に花を手向けるというのも大切な時間だと思っていました。火葬場への出発前にはすでに手向けられているそうです。

広瀬 手仕事から火葬場の話へ飛躍するとは思いませんでした(笑)。それは別れの場が無機質になったということでしょうか。故人や悲しみに向き合うための余白が、機械化や効率化の流れによって失われた。

公文名 はい。もちろん葬儀の小規模化という点や最新の技術の導入によって家族やスタッフの負担が軽減されるといった点では好ましい面もあります。しかし、大切な方との別れの場において、必ずしも効率的でクリーンであることが望ましいとは思えません。

広瀬 最近は煙も外に出なくなりましたよね。

公文名 そうなんです。家族にとっては、立ち昇る煙から感じることもあるでしょう。環境や近隣への配慮なので致し方ないですが、それと、火葬炉と家族の控間を繋ぐ通路が異様に長いことも、生と死の距離が意図的に離されているかのようで印象的でしたね。

雅楽の遊び、

公文名 僕の話ばかりで恐縮ですが、雅楽の音色って独特ですよ。

広瀬 『ふるこはんフェス』で僧侶の方が披露されましたよね。心に響きました。滅多に聴けないですし、迫力もあって毎年好評ですよ！

公文名 言わせたみたいですね(笑)。その雅楽の楽器、笙や箏、龍笛を使いこなすには熟練の技術が要るようなんです。僕みたいなド素人は音さえ出ない。微妙な息の入れ方や湿度や温度といった、音が出るまでの遊びがある。そこを通過することであの独特なフワ〜っという情感と温もりのある音が出るような。



広瀬

より心して聴くようにしますね(笑)。遊びがあることで温もりが生まれるというのは土人形にも通じるところがありますね。ひと手間ふた手間かかったもの特有の安心感がある。信頼感と言っても良いかもしれません。

『スクールナランダ』

公文名 広瀬さんが携わっている別の仕事「スクール・ナランダ」についても伺いたいと思います。東京や京都、佐賀だけでなく、民藝ゆかりのお寺である高岡市・中田・善興寺でも開催されていますがどのようなイベントですか？

広瀬 『スクール・ナランダ』は浄土真宗本願寺派が開催している現代版寺子屋です。多様な価値観の中で自分のものさしを作るのが難しい時代に、このころの軸を作る上でのヒントになる智慧や人との出会いの場になっています。

公文名 「ナランダ僧院」って高校の世界史にも出てきましたね。仏教だけでなく色々な学問が学ばれていたインドの総合大学。

広瀬 そうですね。「スクール・ナランダ」という名称においても総合大学というのが重要なポイントで、「僧侶、多様な分野の専門家、若者とともに作る、今と未来を生きるための学びの場」というのがコンセプトのイベントです。第一線で活躍する芸術家や科学者、そして僧侶の皆さんと参加者が、ともに学び対話をし、実際に体験できる場を目指しています。

公文名 異業種が双方向に對話するという素晴らしい取り組みですね。近年は「専門外のことにも口を出すな」と言う言葉をよく目にします。僕ら僧侶が原発に對して意見を述べると「仏教以外のことを語るな」といった感じでは？

広瀬 すごく分断されていますよね。様々な分野が複雑に絡み合っているのにも関わらず對話をするスキがない。…また出てきました、スキ、の話。

公文名 (笑)。やはり重要なポイントですね。スキ、余白、遊び！それらが少ない現代は寛容さが足りないガチガチの社会です。その社会を作っているのは私たち、人みな訳ですが。

広瀬 寛容になることと自分の意見を持たないことは違います。多様な意見、時には自分とは異なる意見にも触れ、對話を通してこのころの軸を作っていくことが大事だと思います。間違ったことをしてしまうのは大体、他人や社会の空気に流された時ですね。

公文名 ぜひ多くの若い人たちに参加して欲しいですね。次回開催の際は僕たちも宣伝します。

こころの軸

広瀬 世界の未来を予測することがとても難しい時代を私たちは生きています。そんな時代の中、生きていく上での指標やよりどころも大きく揺らいでいま

す。お金、科学技術、家族や仕事など、社会や価値観の変化の中で、選択肢は多様になりましたが、揺るぎない軸を作ることは簡単ではありません。

公文名 広瀬さんのおっしゃる、失われつつある価値あるものの中にそういった時代を生き抜くヒントがありそうですね。

広瀬 まさに仏教がそれに当てはまるのではないのでしょうか。先人たちが積み上げてきた2500年の叡智が詰まっていますからね。

公文名 仏教をこころの軸として頑張ります(笑)。また協力して面白いこと企画しましょう！

広瀬 ぜひぜひ！何に魅力を感じるかは人それぞれですが、競争社会や拝金主義から離れた本当の価値や、美、といったものを見つめることが今の世の中には必要だと信じています。土人形に限らず、手仕事によって作られた工芸品を今後機会があれば手に取っていただきたいなあと思います。そして玄関などに置いてみるのもオススメです(笑)。

※1 伏木の勝興寺を会場に開催された地域イベント。
※2 「民衆的工芸品」の略。民藝運動は、1926年に柳宗悦らによって提唱された生活文化運動。

広瀬 徹也

Tetsuya Hirose

射水市出身。金融、広告業界を経て2017年より(有)エピソードファニーワークスに参加。個人で執筆活動をしつつ射水市の古本屋「ひらすま書房」の気まぐれスタッフでもある。

『ひらすま書房』

射水市戸破6360 LETTER 1F
TEL 080-4251-0424
営業時間 11:00~18:00
定休日 火曜日



◎『うしとうそとやまの土人形』

も置いてあります。

◎古本も随時買取中。お気軽に
お電話を！QRコードはこちら



<いのち>のリレー ～東北から考える～

「復興五輪」という言葉はどこへいったのだろう。いつから「コロナに打ち勝った証」としてのオリンピックと言い始めたのだろう。いや、そもそも「復興五輪」てなんだ？当時の首相は五輪招致の際、福島の問題は「アンダーコントロール」であると世界に伝えた。大きな言葉によって薄められていく現実。

東北の震災から10年を迎えた。ひとりの真宗僧侶として、長く東北と向き合ってきた織田さんにコラムの執筆をお願いした。2021年4月に書かれたものである。



震災から10年 今私の向かう場所

織田 隆夫
Takao Oda

止まらない世界

静かな夜だ。まるで何かを待っている大晦日の夜のように。3月10日23時46分・あと数分でその日が来る・14時間後に大地がゆれる・15時間後に波が生命を飲み込む・25時間後に放射能がバラまかれる。押し黙って、怯えた犬が震えるようにその時が来るのを待つ、ただその時が過ぎ去るのを待つ。死ぬまでくりかえされるこの時間。あれから10年、私たちは何もできないまま震えている。

今朝のテレビではあの時と同じ白い防護服の人たちが病院で右往左往している。生きて白い防護服を見るのはこれで二度目、防護服には恐怖を覚える、旋律が走る。コロナが収束しても放射能は30年も残り続ける。10年たって残ったものは、放置された無人の村と放置された人々の悲しみ。

震災後数年間あの白い防護服が村の中を歩き回っていた。そしてその人たちがいなくなった後、黒い大きなフレコンバック(放射能汚染土をつめた約1tの袋)が山のように積み上げられている。この10年地震はおさまらない、そのたびに震え上がり、あの狂ったように逃げ惑った恐怖が心に溢れてくる。そつとオブラートに包み、心の奥にしまい込んでいた悲しみが突然湧きあがり、涙が止まらない。車を止めて嗚咽のよううめき声をあげる。止めどなく溢れる涙とやり場のない想い。

この10年間私たちはいったい何をしてきたので

あろう。国は何を目論みつづけているのであろう。原発を止めることも、30年50年先の未来を創造することも、私たちはいまだ成していない。子供たちに残す未来、向かう場所も見えてはこない。誰も話はしない、だれも本当のことは訴えない。しかしその恐怖と狂気はここにある。何気ない人々の言葉が私を切り裂いていく。

福井原発(美浜・高浜町)は再稼働を決定し柏崎原発もヒューマンエラーを繰り返す。自分で考え自分で歩く道の放棄、次の時代に何を残すかを考える作業を放棄した時代。恐怖を無かったこと、見なかったこと、気が付かなかったことにして、今の欲望に埋もれる選択をしてしまった愚かな人間たち。

コロナ感染

誰も私に近づかないのは感染病に対しての恐怖からだろう。もしこの人に近づいて感染したら私はどうなるのだ、命を奪われてしまうのではないか、家族を死に追いやってしまうのではないか。そう思い不安になるのは当たり前前の感覚だろう。

感染者を割り出し、隔離作業を始め、行動調査をし、濃厚接触者・非接触者の有無を、確立された基準もなくジャッジする。的確な対応指導や情報共有も提供も受けないうまま、ただ不安と恐怖が増幅する。マスクの報道、行政の対応、同じことの繰り返しの中、私自身の良識の崩壊が始まる。

人間の心理行動すべての根源は、その不安と恐怖の中にあるのだろう。私たちの抱いている不安は、いつの日か恐怖に代わり、排除と差別と暴力を生み出し、その不安と恐怖がすべてを支配しはじめ、同調圧力となりコロナ自警団を生み出していく。多くの人間の不安と恐怖なら排除も差別も暴力も肯定してしまう、それが私自身の姿かもしれない。

永遠の生命

10年前の放射能汚染、0.3マイクロシーベルト以上の場所は、白い防護服を着て眼鏡をかけたフェイスシールドをして作業をしていた。コロナ医療従事者も防護服とフェイスシールドで患者の対応に当たっている。放射能被曝もコロナ感染も、死に至るから防護服を着る。防護服は不安と恐怖から自分を守る唯一の盾、その盾や鉾を持って放射能や感染と戦おうとしている。しかし人間の思考と行動には限界があり、不安と恐怖はいつの日にか排除と差別と暴力に代わり現実から逃れようとする。

いま、私たちの不安とは、恐怖とは何であるう。それは、その向こう側に得体のしれない死があり、「死んだら終わり」の世界を生き、私の死を見つめることなく混沌と生きている実態なのかもしれない。縁が整えば放射能がなくてもコロナに感染しなくても命を終えていく存在なのに。

私は、死んでいった父母兄弟有縁の人々の新たな

な生命に支えられ今日まで生きてきた。これまでどれほど生命を終えた父や兄と話してきたであろう、どれほど導かれたであろう。しかし、「死んだらおしまいだ」と言い放ち、生命を終えた人々に支えられて生きている自分自身の存在すら放棄し、次世代の子供たちにも相談する場所を与えず、無関心無責任に生きていく。子供たちが生きる未来の大地に想いを馳せ、私自身の死後の世界を創造し、「死んだらおしまいだ」にならない生命を生きてみたい。

如来は人間の不安と恐怖の行きつく先を見据え浄土を建立した。生命を終えても行く場所がある、待っている佛がいる、しなければならぬ仕事がある、立ち上がり私の道標となつて「お前もこの道をたどれ」と、勇気と励ましをとどけている。

防護服だけでは解決できない不安と恐怖を見つめ、「死んだらおしまいだ」と思って生きてきた私に気づき、排除と差別と暴力はおかしいと目覚めていく道のりをたどりたい。考えなければ、戦わなければ、想いをめぐらすのだ、子供たちの未来と明日に向かって。



織田 隆夫

高岡市石堤 長光寺住職
鸞翔会OB (第7代会長)
青少年教化や災害支援など
様々な場で活躍されており、
若手僧侶のよき相談役である。
趣味も幅広く、オフの日はキャンプへと出かける。

HAPPY ナムナム



まいどはや!! レン君だナモ。色々と忙しくて、第二号の発刊から一年近く経っちゃった。ページ数の関係でオススメ書籍紹介「坊主の棚からひとつかみ」がこのコーナーに侵食してきたんだナモ。ゆっくり目を通しておくれ〜。



身近な仏教用語 布施 (ふせ)

お布施といえば、一般には仏事のときにお坊さんに差し上げるお金のことを言っているようです。お経料と思っている人も多いのではないのでしょうか。しかし、「布施」とは自分の持ち物を惜しみなく他人に与え、ともに助けあい喜びあうことをいう言葉です。必ずしもお金や物だけではなく、真心と愛情に満ちた態度で相手に接するのも、乗り物で席をゆずることも布施と言います。

インドの古い言葉では「ダーナ」と言い、私たち鸞翔会では、県西部の本願寺派のお寺から様々な物品を提供いただき『ダーナ・バザー』を開催しています。売上金は被災地などへ寄付しています。



坊主の棚からひとつかみ



書籍



『手の倫理』

伊藤亜紗 講談社選書メチエ、2019年

人が人にさわる/ふれるとき、そこにはどんな交流が生まれるのか。介助、教育、スポーツ、看取りなどの場面における“手”を通して、人間同士の新たな関係呼び覚ます。



『自分ごとの政治学』 中高生にもオススメ

中島岳志 NHK出版、2021年

食べること、着ること、歩くこと。そんな日常の一つひとつに目を向けることで見えてくる、社会と自分とのつながり。何気ない日常の中から一歩踏み出すための本。



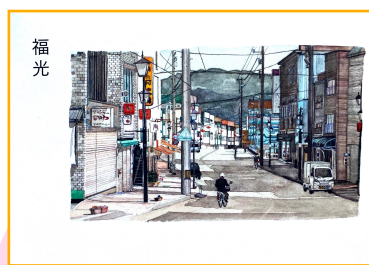
『「鬼滅の刃」で学ぶ

はじめての仏教』

松崎智海 PHP研究所、2014年

こどもにもオススメ

“お寺の掲示板をバズらせる和尚”としてSNSで話題の著者が、人気漫画『鬼滅の刃』の根底に流れる仏教的要素に着目する。普通に読んでいたら気づかない作品の面白さを紹介。



福光

『スピニー』各号



『別冊スピニー「福光」』

居場梓 高井友紀子 他、2021年

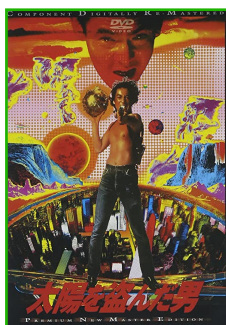
“富山の日常を旅するガイドブック”スピニーの別冊「福光」編。南砺市福光の食文化やお土産、観光スポットを紹介。単なるガイドブックではなく、街をゆっくりと歩いたからこそ見えてきたであろう空気感や香りが伝わってくる。

『ナムナム』との関連でいえば「手仕事」や「民藝」。特に「民藝」は光徳寺をはじめ浄土真宗との関わりも深い。

まだまだ知らない富山の魅力を伝える「スピニー」各号。見かけた際はぜひ手にとってみて欲しい。



映画



『太陽を盗んだ男』(1979年)

監督 長谷川和彦 出演 沢田研二、菅原文太

伝説の監督/長谷川和彦が撮りあげた“ジュリー”こと沢田研二主演の傑作映画。理科教師が原爆を作り国家に挑む。全編にわたって溢れる映画の力。レンタルショップにもありますよ。

Instagram

Facebook

Twitter



各種SNSも逐次更新しておりますので、ぜひご覧ください。お問い合わせは、SNS内のDM、または info@ranshokai.jp 【鸞翔会公式アドレス】まで。

浄土真宗本願寺派高岡教区

鸞翔会